

餃子の街の“鉄筋土塁”

北関東屈指の規模を誇った近世城郭宇都宮城。その城郭もほとんどは栃木県都としての宇都宮市街に埋もれ、本丸跡だけが公園(「御本丸公園」)となっていました。その公園には本丸を囲っていた土塁が一部残存していましたが、崩壊は著しく、往時の規模を窺い知ることはできませんでした。

宇都宮市では、「御本丸公園」を都市公園として整備することに決め、昨年、一部残っていた土塁をもとに、土塁本体とその上に載っていた櫓や土塀が復元されました(図1の↑部分)。

復元土塁は、本丸の南から西にかけて廻る部分です。復元といっても土で築いたのではありません。鉄筋コンクリートで筐体をまず造り、その上に土を被せ植生を施した、いわば“張りぼて”の土塁なのです。ですから、土塁内部は中空で、中央部には埋門よろしくトンネル状の空間が土塁の下を横断しています(写真3)。

ガイダンス施設には宇都宮城の全体模型と本丸の復元模型が、その製作根拠となった絵図の拡大写真とともに展示されています。本丸跡へは、まずここで絵図と模型を見てから、エレベータで土塁の上に登って見学すると、復元は部分的でも本丸全体のイメージはつかみやすくなります。また、JR宇都宮駅近くにある旧篠原家住宅(見学は有料)にも別の本丸復元模型が展示されています。古くて汚れが目立つ模型ですが、こちらのほうが細部にまでこだわった作りになっています。

宇都宮城本丸には北に清水門(②)、南に伊賀門(①)の2つの枡形門がありました。このたびの復元では門部については一切復元されませんでした。本丸にあった城門はどちらも内枡形で、外門が櫓門、内門が高麗門という組み合わせになっており、こうした枡形門の事例は寡聞にして知りません。ボランティアガイドの説明でも、整備委員の先生方からは「全国的に特異な城門だ」という指摘があったと聞きました。そうだとすれば、この独特な城門の復元こそ「御本丸公園」整備の目玉になったのでしょうか、残念ながら諸般の事情でそれは叶わなかったようです。現在、清水門跡は地表面に遺構表示を施し、裏門跡については発掘で出土した土橋(本丸と二の丸を結ぶ)の土留石垣が野外展示されています(写真2)。

ところで、こうした復元事業が行われるということは、これまでに宇都宮城跡が受けてきた破壊の程度が甚大であったことにほかなりません。

慶応4(1868)年4月、宇都宮城は戊辰戦争で、土方歳三らの率いる旧幕府軍によって攻撃を受けて落城しました。これに対し、官軍はすぐさま城を奪還しましたが、この間の交戦で城と城下は大きな被害を受けました。宇都宮城がその後、荒廃していく直接的な原因といえるでしょう。

しかし、宇都宮城の荒廃は戊辰戦争に始まったことではなく、すでに前兆が見られました。安永3(1774)年、戸田忠寛が肥前島原より入封した際、「宇都宮城ハ案外大破ニテ、所替ニ付出張



写真1 市役所展望フロアから(図1の↑)



写真2

ノ上使ハ見分ノ上余リノ事」と報告される有様で、そのうえ「家中屋敷ノ荒廃ハ更ニ甚シキ」状況だったといえます(『戸田御家記』随想舎、1989)。それでもどうにか維持されてきた背景には、当城が日光社参の際、將軍の宿城だったことと無関係ではありません。荒廃が進んでいたとしても、日光への御成りがあれば崩れた塀等を修復するのは当然で、随行の者たちは城下の家中屋敷に分営するため屋敷の修復も不可欠です。藩にとっては、そのための新築や増築となれば出費は甚大なものとなります。宇都宮領は土地柄の良くない下野国内に集中していたため、他国に領分を持っていた壬生藩や烏山藩に比べて、表高に対する実質的な収入は劣っていたこと(『戸田御家記』)も一因でしょう。家中の経済的逼迫により城の維持・管理が疎かになってしまうのは恒常的なことだったのです。

明治4(1871)年、廃藩置県により城跡には宇都宮県庁が、翌年には東京鎮台宇都宮營所が設置されることになりました。明治6年8月12日、野津陸軍少将は、同營所は「極而狭少之茅屋ニ而破損所多ク僅ニ修繕ヲ加候共不体裁者勿論実ニ難供其用」とし、「宇都宮廢県庁之義者其結構頗ル營所ニ適當之厦屋」なので、「陸軍省之所用ニ供スル」に便なりとする東京鎮台への伺い案を提出しています(『明治六年八月九月第四局』戊第九百三十七号)。同5年には一部の城郭建物の払下げが行われていることから、当初は戦災焼失を免れた蔵や家中屋敷を營所に転用していた可能性はあります。同6年、宇都宮県が廃止されることになり、県庁舎が不要になったので陸軍はそれに目を着けたわけです。この時期に營所設置に伴う城跡の地均しが行われているので、二の丸門の枡形などは破壊されたと想像されます。それでも土塁や堀の残存状況は良好でした(『宇都宮城のあゆみ』宇都宮市教育委員会、2007)。ところが、宇都宮營所の移転が決まると、明治22年、陸軍は城跡を売却することにしました。その結果、城跡は旧藩主や町・町民へ払下げられたり、旧藩主から土族へ貸与されることになり、城跡保存の機運は消滅してしまっただけでなく、『名城宇都宮城』栃木県立博物館、2006)。城郭の建物を解体していったのは城郭内に駐屯した陸軍でした。しかし、城跡全体としてみると、そこに陸軍が存在したために城が残されてきたことも、一面では事実だということです。宇都宮の例は、軍が城跡の管轄を放棄した時、その城の歴史が途絶えることを示す典型例といえるでしょう。



その後増設された第14師団が“宇都宮餃子”発祥に関わるとも言われます。軍は城を捨てましたが、町おこしの貴重なネタは残してくれました。

JR宇都宮駅前の「餃子像」



写真3 本丸跡の中央より西を見る



写真4 二の丸西部土塁断面(南を見る。中嶋聡氏撮影)

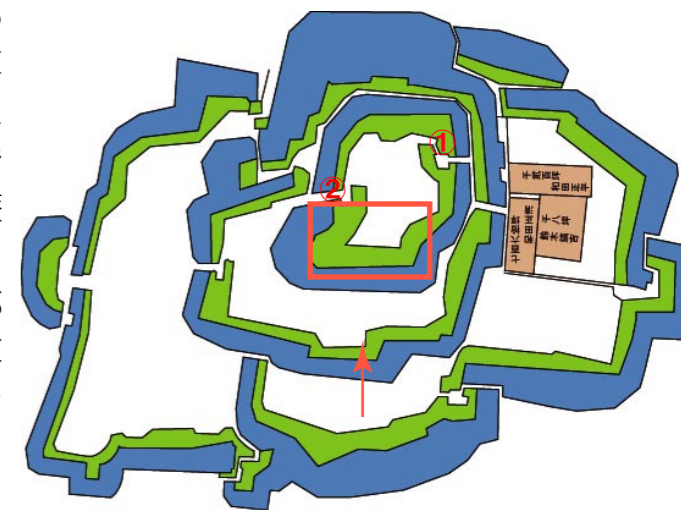


図1 宇都宮城の縄張り(『明治七年十二月諸省』添付「宇都宮城郭縮図」をトレース。左が北)